

要旨

植栽は庭園の主要な要素の一つである。日々成長し変化するうえ枯損等によって失われやすく、歴史的庭園においては、より長期的に状態を保ちやすい景石などと比較して過去の状態に関する情報が限られていることが多い。日本庭園の植栽は時代とともに変化したことが知られる¹⁾が、植栽は気象条件等の影響により地域的な特徴もあることから、特定の地域の傾向を把握することも大切である。

京都市は国の文化財に指定された庭園が最も多い自治体であり、平安時代以来の庭園の歴史がある。室町時代には庭園植栽用の樹木を販売する店が存在し、江戸時代中期には庭作りや庭の手入れを担う人々と庭木の生産や販売を担う人々の双方が植木屋と名乗り、植木屋仲間という同業者組合を組織していた²⁾。植木屋仲間は明治維新後に姿を変え、明治 20 (1887) 年に設立された京都園芸業組合は現在の京都府造園協同組合の直接の前身である。しかし、明治 28 (1895) 年頃以前の植木屋たちの活動については、詳しくは知られていない。そこで本研究では、近世中期の京都で成立し、現在までその伝統が続く植木屋仲間に着目し、彼らが取扱った植物の特徴を明らかにすることで、近世中期以降 19 世紀末頃までの京都における庭園植栽の傾向について考察することを目的とした。

第 2 章では、植木屋が取扱った植物の傾向を把握する過程のひとつとして植木屋仲間の成立背景を明らかにすることを試みた。正徳～享保年間 (1711～1736) にかけて京都では菊が流行し、毎年菊花の品評会 (菊会) が開催された。菊会ごとに作成された出品目録や菊苗の販売者の傾向等から、従来から植物の生産や仕入れ、販売を生業としてきた植木屋たちは享保元年頃から統一して植木屋と名乗るようになっており、その背景に別の本業を持ちながら菊花の流行を牽引し、高価な苗の販売を手掛けるようになった人々の存在があったことが明らかになった。

第 3 章では、江戸時代中期に京都の植木屋が出版した書物『庭木重宝記』から、当時の植木屋が取扱った植物の特徴と、彼らの植栽管理に関する知見を考察した。『庭木重宝記』には、「●●の歌」という項目が複数含まれる。これらは五七調であることから、従来は植木屋たちの間で口伝によって共有されていた知見が掲載されていたものと推測した。江戸で 17 世紀末に出版された園芸書『花壇地錦抄』との比較から、植替え適期や施肥について京都の植木屋と江戸の植木屋は異なる知見を持ち、どちらかがもう一方から派生したというよりは、それぞれに培われた知見であるように見受けられた。掲載された植物種は 116 種あり、草本が 17 種、木本及び竹・笹類が 99 種と草本の割合は低かった。すべての植物が庭園に植栽されたかは定かではないが、『庭木重宝記』の題名からは、庭園に植栽された植物が多く含まれていると考えられる。

第 4 章および第 5 章では明治維新後の史料を参照した。第 4 章では明治 5 (1872) 年以降

に京都の経済復興策として実施された京都博覧会に出品された植物に着目した。明治 6 (1873) 年には、旧幕時代の植木屋仲間が明治 3 (1870) 年に姿を変えた植木商社が出品しており、明治 12 (1879) 年には「造庭具之類」という区分で造園材料としての植物が出品されていた。また、京都博覧会がきっかけとなったと考えられる明治 9 (1876) 年の米国への植物の出荷記録も存在し、これらから植木屋が取扱った植物の傾向を把握することを目指した。結果として、植木屋たちは草本、木本ともに多様な植物を取り扱っており、米国への出荷記録からは針葉樹の園芸品種（ヒバ類）、ツバキ、サザンカそれぞれで 20 品種以上を取り扱っていたことが明らかになった。特にツバキについては、出荷された時点で 150 年以上の歴史を持つ古い品種が複数含まれており、名花・名木と呼ばれるような品種を多数取扱っていたと考えられる。

第 5 章では、明治 10 年代から 20 年代の公共事業において植木屋が納品した植物の傾向を考察した。既往研究で知られる同時期の植栽との比較も行い、京都博覧会常設会場の庭園や明治 18～20 (1885～1887) 年の二条離宮庭園修繕、明治 27 (1894) 年に作庭された二条離宮本丸庭園では名木と呼ばれるような樹木が用いられていたことに対し、明治 20 年の円山公園の整備、明治 23～24 (1880～1881) 年の修学院離宮・二条離宮の整備においては安価な苗木が多く植栽されていたことが明らかになった。植木屋の納品した樹木は高さ 3 尺の安価なもので 4 銭 5 厘であり、高価なものでは 1 本あたり 7 円を超える樹木もあったが、植木屋ではない人物が納品した苗木は、安価なものでは高さ 2 尺以上の桧苗が 8 厘 5 毛～9 厘と価格に差があった。

本研究では、植木屋の成立時期が従来から指摘されてきた享保年間頃であったことを改めて確認し、仲間結成の動機のひとつとして、従来から植物の栽培や販売を生業としてきた人々が自分たちの専門性を価値づける商業上の戦略として「植木屋」と統一して名乗るようになった可能性を指摘した。18 世紀以降の京都の植木屋による出版物が少なかった理由として、自分たちの専門的な技術や知見を仲間内に保持しようとする姿勢があった可能性がある。これまで京都の植木屋と園芸植物の関係はほとんど知られていなかったが、京都の植木屋が 18 世紀には多様な園芸植物を扱っていたこと、正徳～享保期のキクの流行時には育種も手掛けていたこと、明治初期にツバキやサザンカについて 20 種以上の品種を取り揃えることができたことなどが明らかになった。

植木屋は享保年間にキクが流行していた頃から高価な品を取扱っていたと考えられるが、明治 20 年代頃以降の京都の庭園植栽には植木屋の扱った高価な樹木だけでなく植木屋以外の事業者が納品した安価な苗木や幼木が用いられ、それまでの庭作りからは状況が変化しはじめていたと考えられる。近代庭園が流行しはじめる前から京都における庭作りや庭の手入れを手掛けてきた植木屋たちの取り扱ってきた植物から、江戸時代の庭園から近代庭園までの流れを明らかにしたことは本研究の主要な成果である。

引用文献

- 1) 飛田範夫 (2002) : 日本庭園の植栽史 : 京都大学学術出版会, 435pp
- 2) 飛田範夫 (2017) : 京都の庭園―御所から町屋まで 上 : 京都大学学術出版会, 4-7